

「日進わかもの塾」開催報告

平成 30 年 2 月
日進市にぎわい交流館

1. 開催概要

○参加者

高校生 3 名（市内在住 2 名、市外在住 1 名）
大学生サポーター 4 名 社会人サポーター 2 名
成果報告会参加者 19 名

○開催日程

- 1 日目 オリエンテーション
平成 29 年 12 月 17 日（日）10：00～16：15
- 2 日目・3 日目 NPO 訪問
- ・NPO 法人リビングサポートあいあいの家
平成 29 年 12 月 21 日（木）9：00～16：00
平成 30 年 1 月 6 日（土）9：00～16：00
 - ・公益財団法人アジア保健研修所
平成 29 年 12 月 23 日（土）9：30～16：30
平成 29 年 12 月 27 日（水）9：00～16：00
- 4 日目 課題共有・プロジェクト作成
平成 30 年 1 月 13 日（土）10：00～16：30
- 5 日目 プロジェクト作成・成果報告会
平成 30 年 1 月 14 日（日）10：00～17：30
報告会 14：30～16：00



↑ 参加者募集チラシ

主催 日進市にぎわい交流館
後援 NPO 法人アスクネット

受け入れ先協力

公益財団法人アジア保健研修所、NPO 法人リビングサポートあいあいの家、
NPO 法人ファミリーステーション Rin、マシュマロドゥー2匹のねこ

メディア掲載

中日新聞 1 月 21 日朝刊なごや東版

2. プログラムの目的

少子高齢化、経済格差拡大が進み、社会の多様な課題がある現在、持続的な社会を作っていくためには、社会の課題に気づき、自ら解決しようと主体的に動き始めるリーダーの存在が欠かせません。日進市の調査によると、10～20代の若者はNPO・ボランティアへの参加意欲は他の年代より高い一方で、参加経験は少ないことがわかります。そこに対して、若者が参加し、意見を発信し、思いを行動に移しやすい場を提供することで、次世代のまちづくりのリーダーを育成します。

具体的なねらいとして、以下の3点があります。

- ・参加者に、身近な地域の市民活動で活躍されている方の生き方や価値観に触れてもらい、自分の生き方や価値観を考えるきっかけとしてもらいたい。また、困りごとに出会ったとき、誰かに助けを求めることや、自ら行動を起こすことができることに気づいてもらいたい。
- ・参加者が身の回りの困りごと気づき、自ら解決方法を考えることで、地域課題に「他人事」ではなく「自分ごと」としてかかわる人材を育成する。
- ・参加者が立ち上げるプロジェクトそのものや、参加者からの発信が地域の人や行政に課題への関心を起こすことによって、地域課題の発見と共有、解決につなげる。

また、高校生にとっては、以下のような学習効果が期待できるものと考えます。

・問題発見能力

学校教育では、解くべき問題が初めから与えられ、何を問題とすべきか？ということが問われることは少ない。この塾では身の回りでなにがあるのかを知り、課題として発見する力を養うことができる。

・問題解決能力

問題に対して自ら考え提案できる力。問題解決の基礎を学び、それに基づいて計画し、実際に行動に移す力を養うことができる。

・自己肯定感を高める

プログラムのなかで自分を見つめる時間や肯定的に受け止める空間づくり、達成感を味わうことができる経験を通じて、自信を育んでもらいたい。

・シチズンシップの涵養

これからの社会は、どうあってほしいのか、そしてその社会で自分に何ができるか？という考えが生まれてほしい。

3. NPO 訪問受け入れ団体について

市民活動団体に依頼し、4 団体に受け入れをお願いすることができました。

高校生の希望分野や日程のマッチングを行い、そのうち公益財団法人アジア保健研修所と NPO 法人リビングサポートあいあいの家の 2 団体に、実際に訪問を受け入れていただきました。

団体名	活動内容	体験内容
公益財団法人アジア保健研修所 (国際協力)	アジアの人々の健康と生活を守るために、現地の NGO スタッフが学び合う研修の場を提供	<ul style="list-style-type: none"> ・「AHI 初めて始めて講座」受講 ・職員、ボランティアへのインタビュー ・子ども向け会報誌「アジアの子ども」を読み、POP を作る
NPO 法人リビングサポートあいあいの家 (福祉)	コミュニティカフェや、地域での助けあいボランティア、デイサービスなど、誰もが安心して暮らせるしくみづくり	<ul style="list-style-type: none"> ・職員へのインタビュー ・デイサービス訪問 ・高齢者のお宅へ助け合いボランティア活動の同行 ・放課後児童デイ施設見学
NPO 法人ファミリーステーション Rin (子育て支援)	乳幼児とその家族の支援、交流の場づくりなど。指定管理者としてにしん子育て総合支援センターを運営。	(予定) <ul style="list-style-type: none"> ・子育て支援センターについて説明 ・保育士の手伝い、親と交流
マシュマロドゥー2匹のねこ (障害者就労支援)	お菓子作りを通じた、障害者就労支援や高齢者施設でのレクリエーションなど	(予定) <ul style="list-style-type: none"> ・代表へインタビュー ・障害者福祉施設でインタビュー、障害者の方のお菓子作りの製作補助

4. 高校生募集について

①広報について

○チラシ掲示協力

私立中部大学第一高等学校、県立日進西高等学校、県立東郷高等学校、私立栄徳高等学校

○チラシ配布協力

・県立日進高等学校

・日進父母懇談会 (11/12 (日) のオータムフェス) →1 名参加

・NPO 法人アスクネット→1 名参加

・一暇 鈴木さん→1 名参加

・日進・東郷おやこ劇場、NPO 法人親育ネットワーク、特定非営利活動法人 LIBERAS、場りスタ NEXT、親と子のみどりの杜合唱団、NPO 法人ファミリーステーション Rin、あい工房、特定非営利法人海賊船、公益財団法人アジア保健研修所、愛知淑徳大学 CCC、なごやわかもの会議、東郷高校男子学生 1 名

○チラシ配架協力

日進市内の公共施設、特定非営利法人こども NPO、名古屋市青年交流プラザ、瀬戸市民活動センター、とよた市民活動センター、東郷町民活動センター

○Web

- ・にぎわい交流館ホームページ
- ・にぎわい交流館 facebook イベントページ

○メディア

中日新聞 12 月 1 日朝刊なごや東版に掲載していただいた。

②面談

申込みのあった高校生と、プログラム開始までに一度個人面談を行いました。参加動機や、希望する NPO、NPO 訪問が可能な日程などを確認し、NPO とのマッチングを行ないました。

5. 大学生ファシリテーターについて

NPO 訪問に同行し、質問や振り返りをフォローする役割として、また、4~5 日目の話し合いをサポートする役割として、大学生ファシリテーター（ボランティア）を募集し、4 名（名古屋商科大学より 3 名、愛知学院大学より 1 名）に参加していただきました。

①募集

愛知学院大学ボランティアセンター、愛知淑徳大学 CCC、リニモ沿線合同大学祭、愛知学院大学 村田先生、中京大学 斎藤先生、名古屋商科大学 亀倉先生、愛知東邦大学 柿原先生などに資料の配付を依頼、学生に呼びかけていただきました。

②研修

プログラム開始前に顔合わせとプログラムの説明、トレーニングのために大学生ファシリテーター向けの研修を開催しました。

日時：12 月 10 日（日）13：00~17：00

場所：日進市にぎわい交流館

講師：コミュニティサポートみつば元代表 大野聖土氏

内容：プログラム内容・到達点の説明、ファシリテーション講座、ケースワークなど

6. プログラムの様子

○1 日目 オリエンテーション

午前中はプログラム全体の説明や、アイスブレイク、自己紹介、インタビューゲームなど参加者同士や大学生サポーターと仲良くなれるワークを行いました。

自己紹介では「なぜ参加しようと思ったか」「このプログラムが終わったときどうなってい

たいか」をそれぞれ話してもらいました。高校生は「福祉の仕事がしたい」「問題解決の糸口が見つけれられるようになりたい」「自分の意見を相手に伝えられるようになりたい」など、それぞれの参加動機を話ってくれました。



全員で息を合わせてフラフープを下へ。
アイスブレイク「ヘリウムリング」



自己紹介する高校生（左）

インタビューゲームでは、お互い「30分は話せる」という話題をインタビューの時間内で見つけるのに苦労していました。ですが、いろいろなことを聞きだそうと質問していくうちに高校生と大学生ファシリテーターとの距離も縮まったように感じました。

午後は訪問先 NPO 紹介と顔合わせ、コンセンサスゲーム、インタビュー練習などを行いました。



インタビューゲームで
30分話せる話題を探す



アジア保健研修所の鳥飼さん（中央）と
NPO 訪問の顔合わせ

「コンセンサスゲーム」は、自分の意見を伝えること、相手の話を聞くことで、1人で考えるよりもより良い結果になるということを体感してもらおうと行いました。

雪山遭難をしたという仮定で、全員で話し合い、10個のアイテムに時間内に優先順位をつけるというゲームで、高校生チームと大学生チームの対抗という形で行いました。最初はなかなか話し合いが進まなかった高校生チームでしたが、アイテムの順位をつけるための基準を決めてからは順調に話し合いができていました。

「3分無視 3分返事」というワークは、あいづちを打ったり目を見て話を聞くことなど、話を聞く姿勢が話し手に与える影響を体感してもらうために行いました。高校生も大学生ファシリテーターも無視をされている時間は話すのが大変そうでしたが、とても盛り上がっていました。

最後に、NPO 訪問のマナーや、課題のワークシートの書き方などを確認し、1日目を終了しました。



高校生グループのコンセンサスゲーム



3分返事3分無視で大学生（両端）が説明しているが高校生（中央）が無視している様子

○2・3日目 NPO 訪問

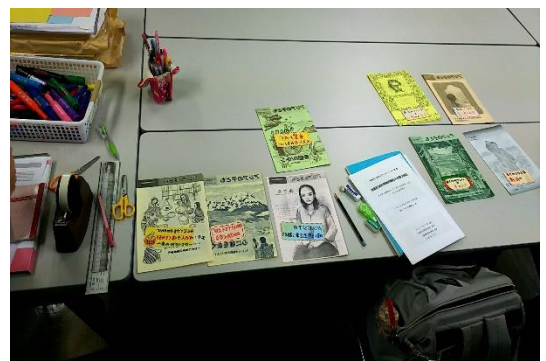
公益財団法人アジア保健研修所で NPO 訪問をした高校生（2名）は「AHI 初めて始めて講座」の受講や、会報誌「アジアの子どもたち」の読み込みとポップづくり、職員・ボランティアさんへのインタビューなどをさせていただきました。

その中でも高校生の横井さん、堀内さん両方が印象に残ったこととして話していたのは、創業者 川原医師の理念、「健康とは、共に生きること」で、一方的に「してあげる」のではなく、互いに学び合いながら社会のしくみを良くしていくという考え方です。この参加型の考え方は、高校生のプロジェクトにも反映されています。

また、講座を受講したり「アジアの子どもたち」を読んで、開発途上国の過酷な環境で生活している人たちのことを、より体験に近い形で感じられたようでした。



インタビューをしている様子



「アジアの子どもたち」のポップづくりをしました

NPO 法人リビングサポートあいあいの家で NPO 訪問をした高校生（1名）は、あい工房やあいあいの家（高齢者デイサービス）でのインタビューや、助け合い活動で高齢者の方の生活支援に同行、放課後等児童デイサービス見学などをさせていただきました。

介護の仕事に関心がある中本さんは、認知症の人がほとんどというデイサービスで見学やお話相手をさせてもらい、「認知症の人は何もできないわけではない、できないところに手を貸す」ということが分かったと言っていました。また、職員の方やボランティアの方が一つひとつの質問に真剣に自分の言葉で答えてくださったことが嬉しかったそうです。



昼食時間にお話を聞いている様子



利用者さんの家を掃除している様子

○4 日目 NPO 訪問・課題シートの共有、プロジェクト作成

NPO 訪問（あいあいの家、AHI）の報告、課題の「自分振り返りシート」などの共有をしました。

NPO 訪問の感想共有では、あいあいの人に訪問した中本さんが「地域の課題を地域の人達で考え解決していくことにかかわりたい」と発言していて、NPO 訪問を通して介護への関心から地域福祉全体へと視野が広がったことが感じられました。

NPO 訪問で全員の報告に共通していたことは、開発途上国の現状や他の施設への入所を断られる認知症の高齢者の方などの「社会課題の現場を見て、それを自分なりに受け止めた」こと、そして「自分たちは知らない、ことに気付いた」ことでした。

課題として出していた「自分振り返りシート」を共有することで、自分の好きなこと、ひっかかっていること、学校ではこうだけど…といった、自分自身について発見したり伝えてみるということができ、参加者同士の距離が縮まりました。

その後、考えた自分のやりたいプロジェクトを全員に発表してみて、大学生ファシリテーターやスタッフと話し合いをして、4 日目を終了しました。



NPO 法人リビングサポートあいあいの家
訪問報告の様子（中央）



公益財団法人アジア保健研修所
訪問報告の様子（中央）

○5 日目 プロジェクト作成、成果報告会

5 日目、最終日は午前中それぞれのプロジェクトについて、高校生同士での話し合いを大学生サポーターも手伝いながら行いました。その後、成果報告会までは個人ワークで発表の準備をして形にしていきました。

14時30分からは、成果報告会として発表を聴きに集まって下さった19名の地域の大人の方々や2社の記者さんの前で、自分たちのプロジェクトや、やりたい理由について発表しました。きれいに発表しようということよりも、あくまで自分のこと、自分のやりたいことを言葉にしようとしていたのが印象的でした。



発表会終了後の交流会で、参加者からメッセージカードを受け取る



途上国と日本の同世代の子どもたちが話せる場をつくるというプロジェクト



小学生のための参加型開発教育がしたいというプロジェクト



高齢者と孫世代がもっと会話ができるよう、共通の話題探しやきっかけづくりをするプロジェクト

聞きに来てくださった方々から、発表してくれた高校生ひとりひとりに共感したことやアドバイスなどをメッセージカードに書いて、発表終了後の交流会で声をかけながら直接手渡ししていただきました。

報告会解散後も1F市民サロンで大人たちが、高校生が出したテーマについて議論しており、高校生が投げかけた問いに少しでも地域の人たちが関心をもってつながったり、自分たちのフィールドでの活動に活かしてもらえればと思いました。

最後に1時間ほど、シートを書いて発表するという形で5日間のふりかえりを行いました。高校生に共通して、「自分の思いを伝えられるようになった」という感想がありました。また、「国際協力や世界のことは今まで自分には関係ないと思っていたけど、知らなきゃと思った」という感想もあり、同年代のいろいろな関心を持つ人たちがともに学ぶことで、社会課題への関心の幅が広がったことがうかがえました。

7. 参加者・サポーターの声

- ・今まで発展途上国を助けてあげるという考え方に無意識になっていたけど、AHIに行って「共に生きる」大切さが良く分かり、一方的な支援ではだめだという考えになった。(参加者)
- ・物事をより深く考えられるようになった。(問題を考え、その解決方法など)自分が感じていることを明確にできるようになった。1,4,5日目は自分の意見を言えるところがあって本当に嬉しかった。(参加者)
- ・しっかりと自分が思ったことを自分なりに伝えられるようになったと思うし、自分が将来やりたい事がいまいちな感じではなく、少し具体的に考えられるようになった。(参加者)
- ・AHIのように、幅広い範囲で活躍をしている団体がこんなに身近にいることにおどろきました。大学生である自分ももう少し関心を持たなければいけないと改めて思いました。(大学生サポーター)
- ・学んでもらいたいときは、自分も学ぼうとする気持ちが大切だと気づいた。考えたことや思ったことの共有は一方通行ではいけないと思った。(大学生サポーター)
- ・たくさんの人と関わって縁ができたというのは自分にとってよかったと思った。また、年齢の違う人たちと関わったことで、自分の長所・短所や今後の課題も見つけることができた。(大学生サポーター)
- ・大学生の存在がとても大きかった。思っている以上に自分と高校生の間にギャップもあるし、社会人はすぐに経験で語ろうとしたり、可能性よりも実現性を重視してしまうのだなと自分の視野のある意味狭さを感じた。色々な立場・世代のサポーターがいるっていいなと思った。(社会人サポーター)
- ・問題を発見することは高校生でも沢山出来る。この問題を見つけた後に何をどのように解決できるかをサポーターが支援することでファーストステップの考案まで到達できたことに改めて感動した。思いを活かし合うことで地域の人々の社会参加や地域教育を興すことができるのだと学びました。(社会人サポーター)
- ・自団体だけで行うプログラムと違い、いろんな団体に行くメンバーがいて、お互いに学び合えるのがにぎわいならでは。もっと多くの参加者がいれば、学びも深まる。(受け入れ団体)
- ・NPO訪問のプログラムに関して、説明時間を短縮して出来るだけ多くの現場を見てほしい。体験にふさわしい研修にするにはどうすればいいか考えたいと思う。(受け入れ団体)

8. 次回に向けての改善点など

・高校生の参加者数が少ない

名古屋市青年交流プラザや今回後援をいただいたアスクネットなど高校生と関わるが多いところにきちんとお願いすることや、高校の先生とのつながりづくり、高校生への呼び掛け文のブラッシュアップなどができるとよい。

・プログラムの時期・期間について

プログラムの時期は夏休みだと参加しやすいという意見が高校の先生方から聞かれた。また、もともとはプロジェクトを考え、アクションしてみることも含めた半年程度のプログラムを構想していたが、日程を5日間に抑えることで参加しやすくなっていると思われる。高校生から、もう少し話したかったという声もあるが、やはり5~6日間は現実的ではないか。

・大学生サポーターが何をすればいいのかが明確でない

場をファシリテートするという役割が与えられていたが、サポーター側のエゴとサポートの線引きが難しい、話し合いの時間が少ない、参加者情報の共有が足りずサポートがしにくい部分があったなどの意見が振り返りの場が出た。大学生がサポートではなく参加者としてプログラムに取り組んでみる案も出てきた。

・大学生や社会人にもやってほしい

NPO訪問や高校生のサポートのなかで、自分も学ぶことが多かったという感想を多くいただき大学生や社会人向けのプログラムにしても多くの事が学べるのではないかという意見をいただいた。大学生向けにつくるのであれば、後輩らにも参加をすすめたいという声や、大人の方から「大人の自分が参加したい」という声もいただいた。